

# うたとかたりの対人援助学

## 第13回 瀬尾夏美『あわいゆくころ』をよむ

鵜野 祐介

### 東日本・家族応援プロジェクトシンポジウム

今年（2020年）2月23日、2019年度東日本・家族応援プロジェクトシンポジウムが立命館大学大阪いばらきキャンパスで開催された。

この日のゲストとして、アーティストの瀬尾夏美さんに参加いただいた。講演やパネルディスカッション、そしてその後の夕食での歓談も含めて、瀬尾さんからいろいろな話を伺い、心豊かな楽しいひとときを持つことができた。

今回は、彼女の近著『あわいゆくころ』の中から、「語り」に関連する部分を切り取ってコラム風に紹介しながら、語ることや聞くことの意味について、改めて考えてみたい（編集に際して小見出しを付し、体裁を一部変更した）。

### 瀬尾夏美さんの紹介

1988年、東京都生まれ。宮城県仙台市在住。東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。2011年、東日本大震災のボランティア活動を契機に、映像作家の小森はるかとの共同制作を開始。2012年から3年間、岩手県陸前高田市で暮らしながら対話の場づくりや作品制作を行う。2015年、仙台市で土地との協働を通じた記録活動をする一般社団法人NOOKを立ち上げる。現在も陸前高田での作品制作を軸にしながら“語れなさ”をテーマに各地を旅し物語を書いている。主な展覧会に「クリテリウム 91（水戸美術館 2015）、ヨコハマトリエンナーレ 2017（横浜

美術館・横浜赤レンガ倉庫）など。2019年、『あわいゆくころ 陸前高田、震災後を生きる』（晶文社）を刊行（本シンポジウムのチラシより引用）。

### 『あわいゆくころ』の概要

本書の表紙カバー折り返しに、以下のような紹介文がある。

東日本大震災で津波の甚大な被害を受けた岩手県陸前高田市。絵と言葉のアーティスト・瀬尾夏美は、被災後の陸前高田へ移り住み、変わりゆく風景、人びとの感情や語り、自らの気づきを、ツイッターで継続して記録、復興への“あわいの日々”に生まれた言葉を紡いできた。厳選した七年分のツイート〈歩行録〉と、各年を語り直したエッセイ〈あと語り〉、未来の視点から当時を語る絵物語「みぎわの箱庭」「飛来の眼には」で織り成す、震災後七年間の日記文学。

### 悲しみ・巨大なさみしさ

（2011/12/05）陸前高田にいます。いつもこのまぢが気になっています。それは、ここで会う人たちの、失ったものに対する悲しみがすごく大きく感じられるからかと思います。被害の大きなまぢは他にもあるけれど、人の中を占める悲しみの割合が特に大きいと感じるのが、このまぢだと思いません。

もちろん人によって、感じ方、考え方は違います。でもこのまぢでは、なんで私が生き残ったの、と

か、他の人の方が辛いから弱音を吐けない、という言葉を特にたくさん聞く気がします。悲しみを共有するというよりは、一人ひとりが抱えている、という感じがするのです。(p. 53)

(2011/12/20) この震災を忘れない、ということ、とても長いスパンで考えなくちゃならないことだと思います。それは、またいつか必ず起こる自然災害で人が亡くならないために。でももうひとつ違う次元で、いま忘れちゃならない、ということもあると思う。

それは、東北で亡くなった人や生き残った人たちの抱える“さみしさ”の大きさに関わることだと思います。親しい人たち、まち、財産、景色、時間……などをいっぺんになくした人がたくさんいる。その“さみしさ”は大きすぎて、もっと大人数で分けあわないと抱えきれないんじゃないかと思うのです。(p. 55)

(2012/02/20) 私はあの津波で知人を亡くさなかったし、これまでその場所を訪れたこともありませんでした。何万人が亡くなったと言われても、その一人ひとりを想像することはできないと思っていました。ただこの場所に来ると、その一人ひとりを想う人が目の前にいて、その人を通じて、名前のある誰かが亡くなったのだということを実感するのです。(中略)

亡くなった人は、自分が亡くなったことを誰かに伝えることもできない。それはすごく、さみしいことかもしれない。

うまく言えないけれど、生きている人、生き残った人、それを知ってしまった人たちが、そのさみしさを、少しずつでも代わりに抱えるべきなのかもしれないとも思うのです。(p.67)

(2012/03/11) 巨大な巨大なさみしさがその場所にある、と思う。けれど私にはそのさみしさの細部

が、どのように一人ひとりの身体に入り込んでいるのかは、わからない。そしてその巨大さも、わかりきることは決してできない。

でもきっと、そのさみしさはとてとても巨大で、その場所にいる人たちで抱えきれものではないんじゃないかと思う。亡くなった人は声を発することはできないし、生き残った人たちは自分や相手の境遇の間で口をつぐんだりする。口に出せないさみしさは、その場所に染み付いているような感じがする。

なんとかしてそのさみしさを、一緒に抱えるような勇気を、そのために必要な大きな想像力を持ちたいと思う。だから私は、その場所を訪れることをやめたくない。

そして、見聞きしたことを覚えておくこと、なるべく丁寧に書き留めておくこと。いま、いまよりちょっと先、ずっと先にそれらを受け渡していく方法を考え続けること。これは、亡くなった人と生き残った人、これから生まれる人を繋ぐことだと思う。続いているはずのものを、続いているものだと常に認識し直すこと。(pp.70-71)

## 弔う

(2012/05/22) 人が亡くなったとき、その死はその場所に、そっと染み付くような気がする。だからその場所を丁寧に均して、持ち帰れるものを持ち帰って、正面からまっすぐに、その死に向き合えるようにするのもかもしれない。(p. 92)

(2012/12/21) まちづくりとは、死者の声に耳を澄ますことなのではないかな。生き残った人たちは、亡くなった人たちと一緒に生きているのだと感じる。まず、死者の声を聞くこと。それを怠ってはいけなさと感じました。(pp. 112-113)

(2013/08/28) 一人ひとりそれぞれの方法で、弔いを続けている。弔うことで、生き残ったその

人も何とか生きていく。亡くなった人がその人を支えている。亡くなった人と一緒に生きていく。永遠に続く甲斐は、その人が生きるための術でもある。

心霊体験のようなもの。亡くなった人が夢に出てきたり、ふとしたときにそばにいるように感じたりする。夢の中でその人が声をかけてくれて、初めて救われたような気持ちになったという。それは、生き残った人の都合のいい妄想ではきつとなくって、ともに生きているという関係の上に成り立つもののように思う。

死者との関係を大切に続けること。土着すること、その土地に暮らし続けることの、根っこのことのように思う。(p. 143)

#### 「復興」とは

(2014/04/13) 復興という名目で何でもしている、ようにも見える。壊れたものを直すためなら、何でもしてしまう雰囲気がある。自然災害で変わってしまった風景を、今度は人の手で変えていく。どうして欲しいという話はよく聞くけれど、さてどこまでやっていいのか？という話し合いはほとんど耳にしない。

はて、風が強くなったもんだ。海辺のもの何にもなくなったうえにさ、山さも削れて、それはそうだよねえ。鹿だのタヌキだのも居場所なくなって下りてくるよね。みんな居場所追い立てられてさ、俺らみたいに仮住まいを探してる風だ。いま我慢すれば、本当にいいまち出来るもんなのかなあ。(p. 173)

(2014/10/09) 復興工事の邪魔になることはしたくないの、してはいけないの。でもね、自分たちが生きてきた場所が土の下になってしまうんだよ。辛うじて残ってた道とか大きな岩もね、ただ平らに埋めてしまうんだよ。復興って、ここで生きてきた私たちが埋めてしまうことなのかなあ

て思うときがあるの。過去と後悔とともに生きてはだめなのかなあ。(p. 201)

(2015/05/27) ……まちが流されて、みんなが散り散りになった。何のためって死んでしまった人のために、まちの続きをつくるんだよ。いなくなった人たちが守りたかったまちなさ、その無念を晴らすために復興するんだよ。俺はその思いだけでやってるだけんとね、なかなか伝わらない気がしてもどかしいのさ。いまの風景見てつと、何か大事なこと間違えてしまったような気がしてね、すんごく不安になるのさ。(p. 245)

#### 「物語」とは

(2016/01/15) 聞いたこと見たことを、実際の風景や個人の顔から、ゆっくりと引き離し、もう一度語ろうとすると、そこに、物語が発生する。(p. 264)

(2016/02/06) 亡くなった人の魂がすっかりなくなるまでには三十三年の時間を要し、それを全うすることを甲斐上げと言うそう。私には、三十三年という時間は、何かが物語になっていく時間と似ている、という予感がある。すっかりなくなるけれど、誰かの身体の中に、物語として生き直されはじめるということ。(p. 266)

(2016/02/07) 物語ることが甲斐に似ているということ。語り手は、忘れられてはなるものかという強い意思とともに、どうしようもないあきらめを抱えているという指摘はとても大切だと思った。(p. 266)

#### 「風景」とは

(あと語り) またある人は、「ところがどこにあるのかと考えたときに、風景の中にもあったことに気がついた」と話してくれた。津波で風景が壊されたときに自分のところが壊されてしまったと感じ、

ということは、ここは自分の中のみで自立するものではなく、慣れ親しんだ風景のそこかしこに頼りながら辛うじて存在するものだと気がついた。だから、片づけをし、倒れたものを立て直し、壊れた風景からかつての面影を探していく作業は、ここを取り戻していく時間のように感じられたのだと言う。私はその話を聞きながら、個人の支えとなる物語について考えていた。

震災後、暮らしのなかにいつも同じようにあったはずの確かなものたち(たとえばそれは建物や街並み、あるいは積み上げてきた習慣や思想など)が根底から壊されて、自分という存在自体が大きく見失われてしまうことが、被災地に限らずどこにでもあったと思う。そういうとき、なぜ自分はここにいるのか、こうして生きているのかという物語を編み直さないと暮らしは立ちゆかず、人びとは苦悩しながらも、まずはその方法を獲得しようと必死になっていた。彼が言う“風景を立ちあげ直す”行為もその方法のひとつだったのではないだろうか。

そんなことを思いながら、あるまちに暮らす人たちが同じ風景を見ているとして、彼ら一人ひとりのところがその風景をそれぞれに寄る辺としていると仮定してみる。すると、ひとつの風景はある集団の物語のありかである、と言うことはできないか。そう考えたとき、復興工事によって進んでいく二度目の喪失の意味がより重く感じられた。(pp. 279-280)

#### 語りを聞くということ

(2016/04/30) 誰かの話をうんうんと聞いていると、その人が亡くした人の話を聞くことがある。私が忘れてしまったら、あの人が生きていたことを知っている人はいなくなるから。そう言って、いまはいない誰かの断片を分けてくれる。会うことはなかったけれど確かにいたはずのその人のことを、私も忘れたくないと思う。

ある人を介して出会わせてもらった“いまは亡き人”を通して、その周りにいたはずの、無数の、名前も知ることができない死者たちを、感じることもある。(p. 290)

(2016/08/11) いま俺らが七十年前の戦争を語るつづごどは、あんだらが七十年後に震災のごど語るぐれえ難すいごどさ。色々間違ごどもあるだろけん、それを合めて、あんだらには震災のごどを語り継いで欲すいなあ。そんなときに、いま俺らが語った戦争のごども、ちよつとは引き継いでくれるとうれすいんだけんとなあ。(p. 294)

(2016/08/12) そうやって、なんとかかんとか語り継ぐのさ。ひとりの経験はひとりの問題でなくて、過去の人と、未来の人のものでもあるんだよ。この世を生きてるつづごとは、そういうごどなのさ。ひとりじゃねんだよ。(p. 294)

(2016/12/05) 語りを聞くということは、同時に、その隣にあるはずの語られなかったこと、どうしても語れなかったことを想う、ということだ。(p. 298)

#### 摩擦と発明

(あと語り) その後も(神戸での…鶴野注) 滞在の日を重ね、話を聞かせてもらうなかで、ふたつの震災は、土地の条件や被災の仕方、時代背景も違うために、それからの復興のあり方も随分と異なりそうだと感じるようになった。

その一方で、大きな災厄のあとに人びとが抱える悩みや苦しみには、いくつも共通するものがあるということも知った。その多くはおそらく、異なる境遇にある者同士、突如あちらとこちらに分けられてしまった私と誰か——それはきっと、同時代を生きる人びとだけでなく、死者や、この先の未来に出会う者たちも含むだろう——が、それでもともに生きていこうとする時に生じる摩擦なのだ

と思う。

震災のその強烈な体験自体は、誰かと分かちあえるものではないだろう。だから体験者は、わかってももらえない、もしくはわかった気になられてしまうことへの怖さを感じ、何かを語ることをためらう。また反対に、体験をしなかった者は、辛い体験を抱えてしまった者にどう語りかけたらよいのかと戸惑う。

しかし、震災が作り出してしまったその大きな分断を放っておけば、その場での暮らしは立ちゆかないし、何よりどの立場にある人も苦しい。だから、互いにわかりあえないということを緩やかに了承しあいながら、起きてしまった災厄を分かちあつことによって、“それから”をともにつくり上げていく。わかりあえなさが生む摩擦は互いにしんどくはあるけれど、その実践を続けていくなかで、追悼式の会場などであらわれたあのやりとりのような、やわらかな発明が生まれてくる。前述の悩みや苦しみが共通するのだとすれば、神戸から生まれたこの発明もまた、遠く離れた東北でも共通して、いつか応用できるものなのではないかと想像できる。

災厄のあとに生じる摩擦と、そこから生まれる発明。不意に、被災して間もない風景を戦後の焼け野原にたとえ、「あのときも立ち上がったから、今度も大丈夫」と笑った老人たちの姿を思い出すと、もしかすればこの摩擦と発明は、さまざまな条件や背景の違いを越えて、大きな災厄に遭った土地や人が、共通して出会っていくものなのではないかとも思えてくる。あのときはいささか乱暴に聞こえた震災と戦災の重ねあわせが、思いがけず、すどんと身体に落ちる。(pp. 312-313)

#### **当事者と非当事者、旅する身体**

(2017/10/05) 体験者や当事者でなければわからない、ということは確かなこと。けれどもたとえば大きな痛みや困難に遭った人たちが同時代に生きているときに、その人たちに何も話しかけなければ、その分断は分断のまま、むしろ深くなっていく。一人ひとりとして、話しあう。そしてできるこ

とがあれば、手を取りあう。

非体験者と体験者が手を取りあい、その体験から得られたものを次に渡すための方法を考える。それは、どちらかの力だけでは決して成され得ない、と私は考える。触れあいのないままの、推し測り合いだけではきつと難しい。互いに痛くても、話しあう。わからないということ価値と思ひあう。それがきつと次に繋がる。(pp. 326-327)

(2017/10/15) 当事者と非当事者という存在がもし分かれてあるとしたら、その間にあるグラデーションを繋いでいくことが大切ではないかな。そうしないと社会は、いつまで経っても前に進まないのではないかな。繋ぐのは、旅する身体、言葉のやりとり(ゆっくり聞くこと、諦めないで話すこと)、触れあうこと、かな。(pp. 327-328)

#### **「もの語れるって幸せなんだよ」**

(2018/01/13) 語るという選択をした人たちが、受け取る相手と自分自身を守りながら手渡しをしていく作法として、物語という技術を選び、使い、開発していく。語りの前後には、必ず他者がいる。そこにあるのは、どうしてもない伝わらなさ、誤読、幸せ、希望、弱さ、孤独。(pp. 332-333)

(あと語り) おじいさんは、「もの語れるって幸せなんだよ」とも教えてくれた。語る人がいて、聞く人がいる。根本的にひとりではないことを支えにして編まれていく物語は、大切な何かを受け取ったら語らずにはおれない人間という生きものが存在する限り、生まれ続けるものなのだろうとも想像できる。

そうして、いつか誰かが遭遇した“語らずにはおれない体験”は、丁寧な口伝の連鎖によって、その時代、地域、人によって多少形を変えられながらも、大切な芯を守り抜きながら、したたかに生きのこり続けている。(pp. 341-342)

本書を、多くの方がたが手に取って下さることを願ってやまない。